源氏目案 上

いまち

57X
27
60

東京都立中央図書館蔵

花島序文あづまうたの
ものがたりをまなびのなかにうるおぼしたれば
水いくあぶくもさらにながれとゞまらず
凡ごけいよく光をまして我國の玉寶と源氏物語
まさるものはなかるべし これをよみてせくのまてあそび
地とるりて花島の情をあらはし 家々の注釋まんち
まちまちて雪螢の功をつむといへども 伊勢おとぐ
の河海抄ハ ひとへに今をうじゝあるを紀をまつ
こゝ もとくもなかの ひれまるものして指南の道をえ
さうさつあれど 等の海よりをもとりてあ成れる
奥をこゝろ 詩の林よりづてくいぞ成まるを見るわへ

是のみにあらず、ひろひあつめたる反故あまたあるべし。ひろい先達のものがたりをもむきぶれば、後生のこころをうんでまもるべき
ざうんやつねの愚眼のおよぶべきにあらず。筆舌のべて能尽
餘情とゝのづくるべきにあらず
宇治の大納言物語云、今はむかし、越前守為時とて、式部
せるめてらくやうりけるに、或夕がおやも
この為時、源氏はけうらなるものかしらぐも
とむもとめこうせさりけるそ、さていの家このゝとに
ゆゑ、むもとめ侍りけるに、源氏はたゝ
ゝることゝ、ゆくゝまよりてゝ、ゝへゝいのちつゝを
ゝるもゝ、ゝゝれゝまゝゝゝゝ

一項法院御記 永久二年 一切物語雖多、或有復或記復也、伊勢物
語、詞指事多、れど、ゝゝ、詞詞勝也、大和、無下
は芳、其外無何物語、書も覚無其詮之名也、源氏物語、
不可説物也、更非俗人、ゝ不為紫式部書之、始一條院有御
説、不可説物也、或人、日本記、ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ら作、于時、尼清少納言、侍、論言号日本記御、名云、誠
諸道諸芸皆編、一篇、不可説、未曾有下説、源氏哥、
芳也、狭衣哥、ゝゝれと云人、ゝゝ、心深侍
事也、更非同日論議、狭衣哥もかく不思、ゝれど、源氏
可不反事、雲泥也、凡哥道、知与不知、水火者也、源氏
ゝ、ゝ詞、ゝ、ゝ、人、不為不可説事也、才二哥

逸是又何人及之哉三作稱也ハ虚玄盡優美之事
もゝへ〻但味見所又不才説也但是ハ我朝完上也
詞ハ更他人〻一ハ為物也未知子細〻事不可弁是他
古今後撰為大意時ハ則一条院ハ〻人〻ハ〻作業
通物狩

一河海序云光源氏ハ寛弘一条院のゝ御宇に出〻て康和堀河院
の御宇ひろまりけるとも
同物ゝ云〻れもゝのおこり殊〻わ〻りへども
西宮左大臣安和二年大宰帥ゝ左遷されし給しハ
前式ノ御ゝ〻もるゝ〻ゝもれなりて〻ひるげさけ
大納言選子内親王村上第十宮ゝ上東門院へ〻づ〻ゝ

やもゝ〻ゝ〻ゝれ〻ゝ也給けるゝ〻ゝ作ゝ稱
の古物語ハめゝれ〻れハ〻〻〻〻〻〻〻〻
〻てゝ〻ゝ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
は通夜〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
式部の月湖水ゝ〻〻心のゝ〻〻〻〻〻〻〻
情〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
わりけゝ大般若の料紙を本ゝ〻〻〻〻〻〻
あ〻〻の女巻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
後〻罪障懺悔のゝ〻〻般若一万六百巻を〻〻〻
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

右大臣ゆるさるゝ紫上氏或アが身よりよへて周公
且白居易の古伝かゝゞ左納言菅丞相のゝ[illegible]と引
てゝさ出しけるべし[illegible]その[illegible]次第書加てゝ十
巻拾遺ゝてゝまつりし氏陸大納言行成の清書
ゝさゝられて象院へまいらせられけるゝ法成寺入道
関白集書を加られて云さし物語世間式アが作とのゝ[illegible]
光北江筆を加るゝゝゝゝゝ也と云く誠ゝ者居の文仁義乃
[illegible]好色の媒菩提の縁ゝよりまで是をのゝずゝゝ
ゝとゝる其をもむさ荘子の寓言ゝおゝるゝ[illegible]
詞の妖艶ゝゝゝ比類ゝるゝ一アの中ゝ紫上の事をゝ
られてゝさゝのゝゝゝゝゝゝ式アの名をゝゝゝゝて紫

或アと号ゝられゝゝ一説云式アの名巡云ゝゝゝ
ゝて後ゝ花のゝゝれのゝゝのゝゝ紫の字ゝ[illegible]
ゝゝゝ云ゝ或説云一条院のゝゝゝゝ上東門院
へまいらせゝゝゝて我ゆゝゝのゝれゝゝゝゝゝゝ
ゝとゝゝゝ也始けるゝゝゝゝゝゝゝゝ式名ゝゝ武蔵守ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑべ前の准擬誠ようせあらくいへども此地況光源氏
とむれとすは欲されば西京左大臣の准ずるとも一世の
源氏左遷の沈ハ同しくられとも皮ゑ好色の先達とハ
ていさゝえざるやゆ今の地況ハ殊よい道とおもう
う欲答曰はそうもれどくるのるしひ大綱ハ其人乃
おもうげあれども行法とそそおるゆはよくく
よかれを模するとうるし漢朝の書籍春秋史記る
こいう実録ともかく有ニ其同欲

一桐壺帝冷泉院を延喜天暦ようすゝへるすゝ或ハ
唐の玄宗のかるれるしとひ或ハ秦始皇のうれ
う例をうきう又天慶ハ門ハ相續の皇胤おりまゝ

ねらもしもあるうるけ生雀院のはゝ今上冷泉院の
ハ後ようし或云ハ条有作者意趣欲光源氏ともを安和の左府ようれもと
ゝへらも好色のるくハ道の先達ようゝへる左中将の
風をまねのて五條二条の后を藤雲の女院勝月和の
尚侍ようそへ或いるくのかハ将のそうをおもへう又
太上天皇のるるもも漢家ようおるはるの日蜀本朝ようはる
壁王ゑホ先蹤を模ようる欲是作物語の習也そうめる
いづれのれ時ようらて分明ようる書あるいさうるはる也
ゆ去下ようは延喜のれ時ようと云心をあくめうしゆ外或
桓武一条院を桐壺ハ門ようる准ずゝ又内大臣伊周公を光源
氏ようる擬ようるといふ一説ともるる欲皆ハ謬説也若桓武

とつくべき筆の後の帝王陽成宇多延喜の代名物語は
わけ一条院なるべし延喜ならば後の代の事にこそ其
上次ぎ巻は此代なるべしすめる千枝つねのつとめ
人業雅村上の代世に盡士也と云て一条院なる
生をず又絵合の巻は業雅院を当代の由載る是論事
一此物語此本一やうなるべし狭衣成卿自筆の本も是今世
は偽なるべし小式部八本とも捨て家本とせ
也所謂二条帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀河左大臣後
房本号黄表紙左大臣後法性寺入道左大臣後一位藤子本上東門左大臣女号京極北政所法性寺殿白本号清涼殿
六条三位後成本京極中納言定家本号青表紙等也各雖證本皆
有異同此勘合古本且可加了見者耶善者後之寡之義也

一黄表紙後成卿青表紙定家二条家用ゐ其入汁をそうむせ
已違所為也云ゐ為相卿阿仏尼為氏法也其入を切て流ゐ
也或説其入八伊行て作也それは定家注を加ゆと云ゐ
一河内本河内寺大臣物源光行八本を以て捨合取捨して
家の本とする所也
一紫式部如常陸介藤原為信女上東門院女房或鷹司殿女房
内舎人勘修寺家祖
良門勘修寺内大臣
利基左中将堤中納言
兼輔堤中納言
惟正刑部大輔
為時越前守
紫式部
勘修寺内大臣
高藤
兼茂
女子
此式部八後ゐ左衛門佐宣孝ゐ嫁して大貳三位を産
作者を生ず但此八西親町南京極西頬今東小院向也

院は上東門院の御所也。又式部墓所也。雲林院・白毫院
南・小野篁墓の西なり。
一源氏をうらむる心をそなへ——東國者必裏の心を尋して見る事
き侍て、好色のうらみ、ばしらるべき歌源氏をば
なるべしと見る。
一九品十住の巻若しくは空の意あると、一切諸をさし、三
乗并に仏と三乗諸仏とを開して二をさし、空と開
も諸法もなきことを、天台の教は四諸法門を
一乗を門、二は空門、三は亦有亦空門、四は非有非
空門也。一切の玄教は此四諸より出ぞ。これよりして故
諸外別立法性とも、真實の道理、玄教の諸

一一巻桐壺　諸を若しくは
桐壺は、御殿舎也。式部曹司よりして光源氏の母
御息所を桐壺更衣といふ。仍巻の名とせり。一名壺
前栽。諸はまれ人のつぼせんざいの盛なりとあり
二巻帚木　うらを若しくは
はきぎの心をうらでその系の道にかやるく西をひかれ
并一空蟬　後のうらびを若しくは
空蟬のうつせみへてげるまぼろし人うつれ
巻の并のくはいうつせの地位第三の并。春日祭使
賀茂上巻春日祭使　賀茂上巻春日祭使　賀茂松のもぐらるる并

一帖あり。此の例、狭元年の様、一偏に同時のごとく
なるべし。横縦なる元、同じごとく成るもの、是を縦
并に云。空蟬の巻是なり。つゝみ濱松は横也。未編
二十二夕顔 縦のなるべし也。并と詞に成名なるべ
心あてなれどそうの白露の光そへうのゆふがのそれ
三名紫 并を名とせり。若紫とつゞき多詞いとゞ
多つらていたしもん紫のねはうひそうのべのはつくさ
并末摘花 横縦のなるべし。并と名なるべ
なるべきなる成なるべ。末摘花を祖なれる番
四紅葉賀 詞を名なるべ

仏山参り紅葉賀とつゞきなる詞はえとゝ。紅葉のくんの巻と
五花宴 詞を名なるべ 花裏紅葉の巻よりもとゝなるべ
南殿のさくらのえんをなぞらへたる
六葵 なるを名なるべ
ほうるもやへのうぐいすゆへ神のまつりと名付
七榊 并なるべ成名なるべ
神ぐらはなるべし榊もるを神といへるまぐへ事なれるさかを
八花散里 なるを名なるべ
花散里の時鳥なれる里と名付れこゝろとゝ
九須磨 并と詞を名なるべ

松もみるかあるかなきかやもいるらんすまもたてこの人の心をこそ

十明石　哥ではこそばを名ゝをる

ゆげきつ明石の浦より紅葉のこやどゝへをおもひやられ

十一澪標　うゐ紙名ゝをる

ふかくてこゝろをまよはすまでもめぐりあひをえまほしかりを

哥一蓬生　横のをしびや哥と詞を名ゝをる

ゆかれこゝもまたそとゝあみたまくつきもまもれまこの心を

哥二関屋　縦のをしびや詞を名ゝをる

関屋をもとばくとづれ哥をうゝひずゝどもとあり

十二絵合　詞を名ゝをる

ふかくよ絵合と法ばきてゝ詞をもをけまどゝ天ゝをうの乃

ゆゝをゝれまうつ月のうゝげをあゝをせまさあり

ゆびの行あり後拾遺集の詞ゝ匠子内親王絵合の夏ゝをうゝ

十三雲風　哥ゝ詞を名ゝをる

月をゝへて独ゝ人ゝ行ゝ者ゝ哥ゝ詞ゝ松ゝをゝ

十四澪雲　哥を名ゝをる

入日さす峯ゝをゝれびく澪雲いゝもれゝ心ゝ袖ゝをゝ者ゝ

十五槿　哥ゝをゝ詞を名ゝをせり

うゝゝ哥ゝ者ゝ詞ゝれゝ槿の花乃ゝをゝ詞ゝすゝれゝ

十六乙女　哥ゝ詞を名ゝをせり

乙女子も神ゝびゝ袖ゝ乙女の心ゝ人ゝ者ゝれ

十七玉鬘　哥を名ゝをる

毛わらう羽いきれるれば むびづいうるすらと野ひこあるん

并一物音 雖のるゝひせ 哥と詞と名ゝきるる

手月を松ひれてゝ人ゝ蛍のこゝ山ひこゝせる

并二胡蝶 雖のるゝびせ 哥と詞と名ゝきるる

蛍でのゝこゝふとさへやゝるゝ蝶まつ虫いうゝくゝうゝ者

并三蛍 雖のるゝびせ 哥と詞と名ゝきる

声ハきで方とのゝこゝ寸蛍こゝていふゝまゝうゝひまゝあ

并四常夜 雖のゝるゝびせ 哥と詞と名ゝきる

ゝるでゝこゝれどこゝるゝゝさゝるゝとゝがもとれゝうれと人や野きん

并五篝火 雖のるゝびせ 哥と詞と名ゝきる

篝火ゝふ池ゝふ恋のゝるゝうゝて世ゝ見ゝえゝあゝかの明ゝ名れ

并六野分 雖のるゝびせ 詞を名ゝきる

野分の例のゝうゝうゝもゝあゝり

并七御幸 雖のるゝびせ 哥と名ゝきる

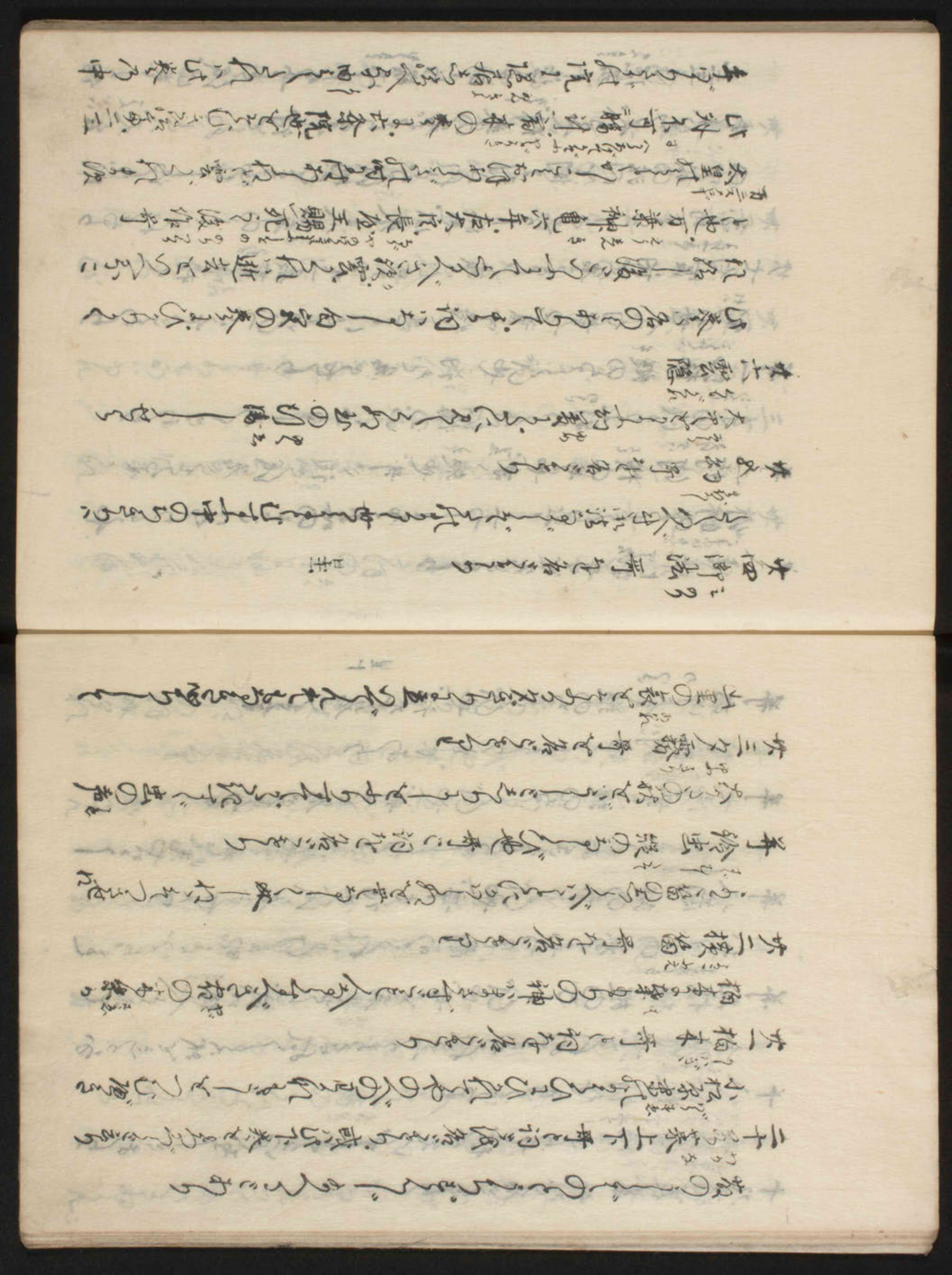
うゝちゝゝゝゝあゝさゝゝるゝゝ

并八菊 雖のるゝびせ 哥と詞と名ゝきる

おゝるゝゝの家ゝやゝるゝ菊あゝれいゝ何ゝよゝゝゝゝうゝ

并九桂 雖のるゝびせ 哥と名ゝきる 或ハ桂ゝと云し

今ハうゝてやゝれゝゝゝゝるゝれゝゝゝゝ



廿三 隠岐ノ法師てそのうち崩れしのち法師山巻ヨリ出
わくはうらべらを抑巻の名ぢうてなどとわしと八天台
の宗教の法門と例より引されたる物ぶとこころうしい作られ
芦島ものくるくるまつ法師也山巻ヨリ八九年のとこまれる事
廿七 白宮 相を名ぢうう或ハ白梅つた一名薫中将也
例の世人ハ白梅つて薫中将ぢきにくつひつでうてうわう
廿一 紅梅 縦のうくびや 相を名ぢうせう
東のほうまうう彩うう年紅梅のいとおもしろくどわう
廿二 竹河 横の井也求ハ縦也 廿ぢ相ぢうう名ぢうう
竹河のくうちうしー一ちうよ心のそこハちうう
廿八 橋姫 ト名 廿を名ぢうう

くるかの心とうてうう寺ぢうの中日袖ぢうかれ
廿九 椎本 廿を名ぢうう
立うんげくれうう椎が本せうくうう森ようちうこ付ふれ
三十 角総 うるぢうくうばを名ぢうう
わげまる紀ぢうるぢうう結うちと結びうあおうで心みうちるのハちん
廿一 早蕨 うるぢくうくびを名ぢうう
うれ云ハうれううんうう人のかうこに付うう巻のさわくび
廿二 寄木 廿を名ぢうう或一名只馬
やうちまくうくうひ出でハ木れまとの枕れうるこうてうう
廿三 東屋 廿を名ぢうう
さくうくうやうけうあづまわちうう付うう面ぢうきハ

源氏目素巻第一

い

一いづれのれ時より　は　数端の辞甚深也先作者とわしりさむ　つくへ　やうを書　巻　終　趣あり
傍人の雖　おいぐるかなや　延喜のれ門のれ時の夏也　伊勢集
の始　いづれのれ時　なんは　詞をとられ
一いと　究也　一いとへの人のうあうて
桐壺の更衣のかうへをかめる心也　うはの撮也
一いとく　早晩也　一　助侍　一いとあ　諫也　禁制の心
一いつく　つきの心也　一いとくの心也
一いとど　ますます　物也　又甚也　ますますの心也

一いつへ　答也　いつくも　一いとめくおとのあり　ば
花島　ものうるもしろ　一いとせき　心　心也　いとく
をおるに心也　一いとけなし　幼稚也
一いちく　耶也　一いとく　休也　いとく　助侍也
雲の上人　男女也　昇殿の人をいふ也
一いとも　完赤也　一いまさら　今将也
いとけなくゆかしきまうをぬ人　哭之哥　味勘
拾遺集　おすぐれあうとたてそ　地位義にもうどうのけかれ
一おそ　拳将也　一おちおほ　居立也
ふたかて　地元の行也　一いとそ　倚子也
一いらけなる　いらけなる　僻夏也　いとさるさといつへ

為家の説初もゝゆひ[illegible]が冠人のゝふまうてゝ世[illegible]心を
く京服の[illegible]女を法民まれをひがゝまられ心也
一いさゝひ 勢也　一六日いつゝむいゝどゝうむべゝ
一いさゝる 強盛　一他の心ひろく 池底也
一ひゝられ 世ゝ名ゝ[illegible]ゝ乃の[illegible]ゝ人ゝも世上ゝ
一ひゝるゝひ也　一ゝゝの紙ゝる文 音いゝこ多ゝ
懸書ゝゝさゝゝ也　一いゝる 優ゝる也
いまけゝられゝゝゝゝゝゝ三界唯一心万法唯識の心也
一ひゝそゝ 作ゝゝいゝ心也 言穀ひゝゝゝ[illegible]ゝ云心也
一ひゝゝひ 乗ゝひゝる 指也引ゝゝゝるゝゝゝゝゝゝ
一ゝゝゝ[illegible]ゝ馬ゝが第ゝ女ゝ遠ゝゝて法ゝ変ゝゝ素ゝる也

一いまめゝゝゝ物の声 経法も世ゝゝゝゝゝゝゝ光ゝ
ゝゝゝゝゝ今指ゝめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一いゝゝ 伊ゝ寺を分ゝいゝ
一ゝ長官も次官も職掌ハおゝゝゝゝゝゝゝ諸國寺院乃時ゝ
分長官の変を執行也 ゝゝめゝゝゝゝゝゝゝ寺を分ゝゝゝ
一いもゝど 系号ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古今の序ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一つうそく 有職也 又右族也

一いうそく 成ようせる 也せる。ようそくへらし 令婦 かのへしも同

一いうぢ道ちうと 後の世の世のたのくというち

一いづれそど 小ぢぐ ぶる風 まそ ひけ 家のやぐらとまく

ゆうしちうべきいうれちうと

一いたれいつさうづく 世也 一条殿ち一条と西へ切 塔也

一いうち今ぐ成 生霊也 又うづ 昊のくとや

一いちうやうち 早速 すうや やうちぶくうちうと

一みんちうだ 掩韻 古詩の字とみうぐさ字下句の末字と何

文字ご推して 時 頁 ちうかや

一院のれしふぐく 河 ちうと寸 宇花物語 名伝と云 れ 朝の

夏 松 時のおく 秋 天 暦陵と心うそて言うと

一いたく 又 春のうやうた 多 たすうと

一いちうのうてぐく 青幣 白幣 日本記 又 五色幣 ちうと

一家とうちうれ 雖家 三西月 落涙 百千行

一ふつのにぐちう 水 渭也 一石山 聖武天皇 内宇 金 鶯 仙

人建立 云

一いちうくれうとれつきぐ ちうき

めひ地 ちうぞめ 掩 襖 ひや ひ地 ちうと深 ちうや

一いうめて うくぐ ぢうめうぐすや也

一いうくうち 張騫 漢武帝 使 うて 得 て 来て 天漢の源 不 定

うして 孟律 ちいうちて 午 ちうと 世 て 仰 と ひて ちうち

一いうちうち 小井 日記 ちうれ ぐ ぢ 尼 ぢうて のちうや

一一世の源氏　源氏と申て四つ氏一世の源氏と云也一世源氏
任官已後即位例　光仁天皇元大納言以外多略之
一いまひとつの給ふ一つ者つぎのことは一説私好心とうけ給也
一いとうもう　いとうもう海をそ奥と云奥也我身のうさとうる
ひとうもう也　船のうらと海のいとうもうまつ人のうらと
一家うらかるとしかうう備後也
一つびき　射睡
一いとうへと　礼楽とうくうつれうと尚代を玩ぶくう
一いとうう　一向也
一日出先
一いとうれのれ也　極楽浄土を云
一いとうも　雲の光とうの給　報人恩ゆ奢春臺　註恩和也
一へまつれとうすてゝ　未濃ゆ代事代うゝ上ハ白く

すてゝ紫或へ紺ゆ深ゆ也
一つうゝ心うゝ　古今序
一いとうもう人や　弟子を給
絵ゝ　ひとう女の事
一いとうもう人と云歌
一ひとてゆきひれ事
服若沙法の心を合うて碎空碎破の空理ゆ
うてゝ空清礼を今畢竟空と説て皮ホの様とゆ
うへてゝ空丁念のひとうとゆへのふ是とつひてゆけひと
一ひれと云へれ文服若ゆ方法一如の心れと云
一つつ　鯉
一家れひとうて　尚侍ハ家
一家れひとうて家づへのうれ代ゆ
いとうれ番人をハ古うう宮うう也
一いとう也山　清涼橋奥列也文を
一いとうう　三位うう紫の文と裏

仏人ヨ加階のゝ紙ゝ
一つゝゝめゝれ　ゝるけゝ
一家ぢゝのぞむ　女三の家月と云と帝王女選業人事也
一ゝゝゝゝ　ゝ氣巻　息巻　ゝ紙いゝゝいゝゝ
一ゝゝゝのゝゝ　源氏の天皇世紙治治ゝゝ　忠仁公ゝゝ
ゝれゝとゝゝ行結事と云ゝ　ゝれゝ女三ゝと准ずれ也
一いのゝゝて　今ゝゝゝゝ也　世の者ゝ紙ゝゝゝゝゝ也
一いゝゝれゝ　鶯と活文ゝて　猫と女三ゝ比ずる也　鶯ゝ紙ゝ猫也
一いゝゝゝれゝゝ人　猫ゝて女三ゝとゝひ半ていゝ　猫ゝゝて云也
一ゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ也　一ゝゝゝゝゝゝ

一ゑのうら浅茅　あさぢの原の露也

一ちとうけう　大悲の服衣也　一いげくとう　ち人の可に為へ、

ぞとさまあらて、家こうれ服者の家とうめうし

一ひけ　一いけそやもろぞやるしぐそのこのごも　ごとくれの之也

字清家ゆうべ〳〵　本れ本ゆ子をもとゆ

一いとせの森のうつこ　馬めいうち　人げてあると人づてうぞ

ど云心ゆ門へてうちうち　黄の中老ゆ一枝遊のひ〳〵とこの路ゆ也

一いうげ〳〵ゆ日とくうか　鶴日不必暮

一ゆうづ　苔もとしあひつれとも長実度也　大老もめしうこ〳〵とも也

一いげこげ　今の本陣川也　いぐ〳〵ゆとも云り　宗祇天皇相撲の事也

一ゆうちけゆ〳〵　触ハ地とうゆ　ぐゆ勇也　心やとく〳〵れとうぐゆ入心也

あるうとつへうゆうけうとけ心もとくうとうに心ゆうく幸よとうゆ

一いぐうう　伊賀月女也　中媒也　うめうけ狐をいゆうう

一いうとけ　長ゆうとけ云心也　一いげくうう白雲のくうゆ山うけ

ゆうらけうとも也

一ゆうもゆれゆ〳〵ぐ　真実の織ゆあるずうて使うひすゑ

一ひうゆ　いゆ〳〵ゆうゆ世俗ゆ云切也　けうさ心どうゆ

一いゆへの扇　お宝　うゆうて文宝ゆうゆ也　冬の扇也

一いうちの布也　摂政関白布也

ろ

一ろくの物　禄物也　一ろくのうひつ　禄幸櫃

一六条ゆうう　れ息布の夏始て云也ゆ　古前坊の小方也　秋好乃

中宮のれい母也

一六十巻さいかい　玄義十巻

釋籤十巻　文句十巻　疏記十巻　摩訶止観十巻　弘決十巻

一六位の中にも殿人はあれども六位殿人は麹塵の袍を着もの

と青色とは今も極臈の殿人は着もの也

六位すくも　六位冠者と云ふ　すくきは更衣のもちもの

一六条院はもとは　河原院を模するもの

一ものう　多論也　一六条院もと　花鳥幸し　軸云別

業也　陽成院もと　おりまもの　志賀院と号也　陽成

院の出後　宇多の御門仮名　朱雀院御門也

拾遺　あり　さら後六条左大臣雅信云の仮　長徳比叡堂

別当寛者　仮名　物語　六条院　もとものの仮名

一六条院もと　白河院　内もと曹司　又六条院

の内も曹司　ことも　二条院も里也

一六十信のもの　大般若轉讀の

もの　七僧を六十僧の中にあるべし

ものさもの　唱唄　ものものもの

は

はもの　毎事　恒常　多くこりを心もべき也　二流者

はものう　聲聞　一所もの　長宮殿　職員令　御門

ものを給べきれみと　素服　ものもの

一はもの　もの　もの　もの　鬼　日本記

一はもの紀の更　皇子三歳　袴着の例　冷泉院　天暦四年

七月廿三日　宇多の時　外例　多　女人の日

一はるき　無墓無墓いとひちきうちなべー
一はるさむき　将寒・肌ごにうちむ流ちる・膚の寒せ
一はるぐそうういく　愛心　一はるぐまねい門と更衣られ
ちちいへらしぐむい養育の心せ
はるとうべ杉とはさん　左天願作北翼島　在地願作連
理枝　長恨哥　一はいぜん　陪膳せ　四位殿上人
一はるもちてぐに　ぜぐにの
のすか役といへり
相聊むーー　ぜちのおーー　ぜちのおーー　ぜちのおーー
ちてぐんちちと治べきさ　今はぐぐ拍事あーーぐ云心必べー
一はるせ　博士　一はいーーはちのよ　親主ハ下
服の拝舞い清涼殿の東の廊ちて前へ仰事拝わち

一はるーーーー　草筆のーー　一はるのちとちのちとちやう
一はぶりぐ　不着　一はやうちとちのちとちやう
といへり　音の事せ　一はんちちぐ　盤渉調ハ冬の調ちれば杉ちあひて引ぬべー
一はるちちちちる　一はげを　勵　念色心せ
一はるちちちちる　傍側あーーはちる心せ　飽足　二度有ば
一はるちちちあすのめ　夜ちれば引へるせ
一はるーーー　服がいちちちくとといふちち
一はるーーーー　中部　常のちちちハ皆なちちと是ハちちむ
ちなちぐやうーちちちる也　花鳥　下ハかうーーちる投ちちちち
ちーー上ーちちちをちちて分へあぐちやうにちちちといふ車ちちー
下ちちちてちちへのちちちちあぐちと中部と名付ちる也

一はるゝゝ元弁也同時
大井の為兼卿親王ゝ為兼卿は皮れ女は准して心うべし
一はつ雪ふる里の柴　物語紫式部ゝ為兼心は明也
一はるちかき　教書文字ひらがなを也いろはを云也
一はげしてん　をとづれて
ゝさはぐゝゝあれを云也
ゝゝ元そこゝゝはすゝゝこの心也　一はぐゝゝめも　花鳥山海語云
東海有黑齒國其俗婦人齒悉黑漆今案日本東海乃中れ國也俗ゝゝ
ゝれとはゝれば古代のおぐゝゝのゝゝて紫の姉ゝも十歳
ゝあゝゝゝで齒黑めとゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝ　仁和芹河の行幸次第八条院為御幸
興ゝ俊物語階位ゝゝ見ゝ吏ア王記天慶六年也今案南
階のゝゝ柱と二ゝゝゝ上をゝゝいゝゝをゝゝゝ
ゝゝ云鳳輦とひんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
紫れ下れゝゝゝゝゝゝゝ　一芸のゝゝれゝ山水　花鳥
はの井九云芸のゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

軍あり。碁盤・山茶・山橘・海松・青貝の石二基也是をば
繁よりくさくさとあり。やがて　一けうや　繁の基ごとに
もせさせ給へ。はあ人とうち。神のさうとはなくよのまつりのさう
ほうぶ。後行さうこうの後いくかそれどうひさうとなる
一去やさんのうとも先ゆうんぎられどちん此相引ゆれども
所祝の心との名也只芸はしめくしまいくもんの心さうる也
一八省ようさて行けうる　孝徳天皇大化四年二月始置之
大極殿とは八省といふ。八省の本院なり。
也。朱雀門の内一町はあり。南限冷泉院北限中御門。東西
坊城西の坊城と限也。出車八八省の東西に立つけうべし。
いぶし車八結の夏也　一白虹日とはあらたまとぢうら

亦漢書同音荆軻墓燕丹之儀白虹貫日太子畏之　燕八
太子丹ゆ姫皇とうるまりけんうきしに今源氏とうるへいうるや
既未ま日はうめるかと二角云くはうはけうる安義也。白虹日
とつるあけどもはあまとうるぶうる心ざしうげてさ事
ゆ。刑軻とそれうるや。今源氏を荆軻うるへさう冷泉院を
太子丹ようるへいくうるはや　一芸秋のれうさやう　春秋御
讃岐同云源氏のとこうる法由也定うる法事うや是さ
一源氏のとこうひ給九一勅禁ーうるけ定也
一けうのまくのさうび　甕頭竹葉盃春熟階底苔微入夏開
一けうる居ゆ居のうるのうるうけ是ようるうくくしんのうく
一けうるざのうる盛　鉏をはくむ

也繰唐紙

一ひやうしとかうあるも　一はうし絡りす　柏子を丸也

一はちがさ　象服そくさうも也

紫明ま蜂吹挿心也是ハ沈香也

一ゆうくくくくて　紫雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ才十四皇子

まて此女皇ハ母中宮温子昭宣公の女也兼明才一親王ましま

更衣腹故人臣也ハ例ハ

一はつかやま手愚親ま賢

まのまくくくも也況愚子乎

一はるくくくき　異の動ゆや

うくや目の動とめうくくさとつぐくく

一はつくくめ　歯固元三の日の夏也歯ハくくくひとやよ

ゆう歯固ハくくくひとくふむゆや高つき六本ま者とも一の重ま餅

大根猪とも也ひ餅ハ近江の大くくのつくくれ餅と用也則真國乃

鏡山の所と承て

一はつれ初ましのべきおさるさん

ひねて文書所とよ也とをとを

一茶ハおれつ俗よが代初ゆと

心也

一方等經の中に　方等經の中ま

四教をちのくべて多くくま説ゆへくゆ是ハ淨名經ま也ひ時者のさと

ましまつず今ハくくくくとも之ぶ化の衣生ぶ化ぶ衣くくくゆ一會

の衣生ま雲指記して加業法ゆ三子ましまるひ三子男へ法声聴元

とゆくふど云心歟

一はゆ孫とちくべ四皓朝お付の言

羽翼已成と云くゆ

一はおちゆのて　放おど云ま　范蠡

范蠡不淦寢食と云て母屋の角成ま多くくけて中と障ま外

ゆくくくく

の心也。うゑん袖ハ疵志のうゑ
一芸の付ちらけ　枝とハ早下
一芸のくむけのめさ袋　すきさうる袋也。三月の素ちれば芸志
めくもの四さ也。めさは旅りの人ゝ袋ゝ入て送物也
一はつうるみが　祝ゆがゆ
ゆゝまるびうるおハ神の祝受のうゝ
ゆゝしつゝ心ちゆ
一去秋の行幸　如覲行幸也云
一去のゝゝの〇ハ芸の調よハ太変ちれ
ゆゝ源氏のつゝ切ゝ　見ゝ也　一はゝゝゝれ　股黒ゝ也
一芸のゆゝゝのへて　蓮花也　一ゝちす葉浅　来也いゝる
蓮華ゝ　ゝれゝゝ今日の別ゝ
ゝゝゝて結事ゝ　ゝ畜　淫心也　弄花

一芸の　羽衣の　羽衣ハ　ゝ　ゝ　源ゝ　早竟　皆空ゝ　淫ゝ　也
一芸の香ゝ　芸の香ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　早下の心也　風の
ゝゝゝ

一舟ぶなや　浦舟の舟ハ早下りする人也　夜船の時ハ早下りする也

よめるをとこをしうる也

一はんさい　犀角のかぶとしたる

有職ニ云ハ　班犀帯　官位ニ位の人帯之　眼者烏犀

第孫間ニ　班犀とうすもやうとの事也

一蓮とつへし　女郎花の名ハあるいとうとうへてのあるいとうひら

ぬそと也　実ハ蓮子　一はちすの　蓮子数盃と詩ニ

も作り盃の名也　蓮子の也ちる青磁盃也

一葉のうすきとも　陵園妾云　新式ハ花令ハ葉落白氏文集

ハ詩ハ名也のうすきとも云　今相撲の八番の変よのうち

一けうとうず　毒ハ乳也　ちうけうとうさまとて　いちのきとも也　ちうちる

一ハ　ちうけうとうず　毒ハ乳也　ちうけうとうさまとて　いちのきとも也　ちうちる

一ハ　ちうけうとうず　毒ハ乳也　ちうけうとうさまとて　いちのきとも也　ちうちる

一二のまつ　次の町と云心也

云也　饒舌

一にうさけうちうさ　富貴ちうと

一にうちうとうちうち　俗人ちうも

一にうさてのうとうちうとの心也　ちうちうとうちうも

にしのうい　西詩也

一にるく　毒二　第二と云心也

一にびぬ　祝毋の服衣也　三ケ月の服也　純多也　こうやうるんとハ

うろのうにと云也

一にびあるれてうびぬの黒之の

すくうさ也

一仁王會　七箇月の服の文ちうる

一にうこうにうう　ちうの心

ようちうさ也

一にびちうのうす　服者の百代落

ちうち

のへらもうゝびゑの印を用ゐる凡悦らけ手丁の義云ふ
ゆゝしきうたうてん也惟ハ是もよびいわおもと
一とゝ　にゝうゞく　入学也　一に伊勢ハ鳥ハ枕詞也うけを
ゐゝゞる動也若ごもとあやめとうけをゐゝゞる也宗教ゝ法
さゝ別るまゞこゝろゝれ也ゆゝこまハ若こも也まこゝ過ぎる
一日本記　文巻始神代至持統天皇御世
一西山ゐゝれる　仁和寺と云也光孝天皇れ建るゝ
仁和年中ゝ代ゝれゝ仁和寺ゝ号ゝ又義平れ門
八天暦六年三月れ出家ゝて四月ゝ仁和寺ゝ選れあるゝ式物
一後の業産院ハ彰平れ門ゝ准ずれこれを合書れ也
一ゝゝのゝ十方　後是西方過十万億佛土有世界名為極

一ゝゝひもゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝあゝゝ自ひゝゝと云也ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝび深の袖ハ変ゝ人の下襲の袖ゝゝ
一にゝゝゝゝゝゝゝゝれの声ゝれ昼所のゝ治ゝれ
ゝゝゝゝあゝゝゝ身ゝ蓮とゝゝてのゝゝゝゝゝゝ
一にゝゝゝさ　純ゝゝゝゝゝ　一にゝゝゝさゝれゝゝゝゝゝゝゝ
極仙窟　容顔　似閻浮潘安仁之外　翔元調如兄崔季珪之ホ
妹　元調のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほ

一ほい　本意也

一ほうげ　火氣也

一ほうらいの山　是ほうらいの山

一ほうけづき　仏法ものさも

ものさもなくて云也

一ほゝゆがめて　もくもくもくめも　方曲也

一ほうこゝろ　心ろ

一ほのくたも　ほのくもの

是ほ彩色ようもの今が持ち来れば　それとこの心ろや

一ほのかす　ほいかるほど　我心が　ほいが添へ　ひとつ心や

一佛のほとけ　ほとけさの入　ほも　従冥入於冥　永不聞佛名

一佛いとのけ　ほとけ　上の句ほとけのほとけ　ほとけ

ほとけ　ほうのほとけ　ほとけ

一法花三昧　ほとけ　ほとけ　山おろし　ほとけ

上記は字經三昧　ほいく　ほゆ　常行常座　行住座　非行非

座四種也　法花懺法　ほ行住座の三昧也　懺法　天台大師

或院　条式　ほくほく　六時　六根の罪を懺悔する法文也

六条有房　云懺法の曲　山風のおろし　瀧のけ

ほとけ　口偈のほとけ　ほとけ　ほとけ　書　ほ　音　女房ほ

ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ

一ほんもの　本也

村　ほの名也

一ほとけ　廣也

一ほそろくとも　保曾呂倶也

一ほとく　弘と云心也

一法衆三昧　普賢大士　南無法

衆ゞ三昧　普賢今相ことゝ　大ほど同変也　法衆衆　生普賢ど同體

ど云業也

一ほけれてみれうる心也

一ほうこげこ　ほうこうる心

惰れ何の何也

一ほうこ　仁徳天皇のれ時、物て

れ夏と結ぐとこへ結也

一ほんさいのうぐ　弄　世ぐと改

奉の夏元又何夏うても出家こ

一法しいひちつど　貴僧　供

一ほうれ里こいまうちつうや

ううこうう心也

一ほうこうとうすうくうこ花うつ

田のもれぐうちこも蛍とつひ夏

花　ひのぐひうく面白く新

ひひくるくのうのうすうくるや

一部云うと　夜月交雲外語　更後雨中声

一佛のつとうるこうこ心こて　九如来出世の本こ　元聖一如吾恵

不二の理と伝て、衆生のまうひと速こ証さんとそこしりて、大乗

心うおうこうこ心也、おうこ玉も実報花王こて、花厳経流布時八

うこ法華よううしこやううくどとぐうて、元生こうこ

ひうて伝る報身の姿こて、修行の報こて是又うかりこ形こ

て流のう三界唯一心の法うれば伝の心もうかりこうこ

一ぼうこうぐんうう　佛の内御あくこうれてうれば則菩提則

煩悩也、純一実相こて更こ別の法うう

一ほうそびけかいも消滅也　一ほくく皮　驚こ変也

一ほんこうすべき　玉と女の木と定法こうう

一ほけうこうれうう心也　一ほうこかこ　朗あんこうれ心

一ほうそうが　赤面女のムうりうあざる也こうこうこ也　若石道

女はなをこそ色花開也 組まて綱を付たる
一佛のうでしの仏殿は滅度志ある人へ色常住此不滅也と云
給也不滅とは弟子遊歩しくさ尼公の心と云也
一ぼんしの梵字也 一仏のおるがちやうあい花は
帳臺のうへ仏ごおるがく経の机とれるべし
一仏のおりまる所観経云阿弥陀仏去此不遠極楽荘厳おひ
やらうこころ也 一仏ゐもちの人業の所事を
のみる也 一ほうでめ中道のほる出也
たてたいはしひのまさもんでの所也志のずきいほる出
はるれいはゐ為ご云一義也 一ほうらどこそのきも
一ほうけい経云貪欲者不誑法者也

一ほうしん法性寺 負信心建立しかる也
一仏のまを先とす仏のいましんをなげる
一ほうらう法心名香の蜜をすくるく人て落也
一ほうえ本也 一ほうく反古也ほんぐこ
へ
一ぐらう割納也前に立る屋也曹司人の住也
一ぐんぐも變化也 一へいらう花平定文がわざ者也
ちゃ平仲宇治大納言物語云平仲が女のもとへゆくてが
くうれとして祝の水入をあとこよりもちて用をやく
けうとは心えて去とはるもとへ入ちうとしらそこぬく
それは続とこうとしらそこぬる

[illegible]

人ゝすゝつくいふゝそゝにゝやすゝけんゝ[illegible]也

一ゝのゝんゝ寺ゝ文字れへんとつゝさゝて[illegible]

一へいしゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]也

一へんげの地とゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

一こんもうき　屯食（トンジキ）　けうくうこうのもや今は昔の子ゝ月し

一こもうもうこと　あもうげさや　一こもうもうこと　本妻（ホンサイ）ものこと也

一こもうもうふぜしの心也　一ものこうさん　元出（トリイダ）しーかさうハの心

一こもうもうこと　共（トモ）也　友（トモ）こもうもうこと　皆（ミナ）友（トモ）の事（コト）也　五風（ゴフウ）共こあり

一こもうもう悵も　賽馬（サイハ）　平（ラノウタイコトハ）　詞也　こもうもうハ　愧（クヲ）也　ちやうハ　慌（クヲウ）也

一こうもうくて　無動（トウモウク）也　一こうでのふ　元出（トリイデ）也

一こうもうこと　戸（ソヘド）もうのもれかくれけうれも也

一こもうもうこと　外（オカ）こもうもうこと　まうの心也　こもうもうこもうもうこべし

一こもうもうけこもうもうし　汎（ミヤストコロ）　息所（ソクヒ）　姫（ハヒ）　いつれもうもうしーと　さ陶（ヒ）ぐいひる

びーと　沿て　又　ひさうへしーと　とづれこもうんいとゆしーさこもうもう

一こもうもうこと　ものうもうこもうもうこと　いさきのてとこうもうこもうもうこもうもうこ

ちひいれこもうもうこもうもうする拍也　一こもうもうやうのこと　傾城聲（トキウノコエ）　僧（ソウツ）

もうもうこべし　引声（インシヤウ）　れあうぶ　強強（キウウチ）

一こもうもうこ　外（ホカ）也

一こもうもうこ　優曇華（ウドンゲ）の夏　人壽（ニンジュ）八万歳（サイ）の時　節（ジセツ）　金輪王（コンリンワウ）　遶四洲（ニヨウ）　其（ソノ）時海

水半減（ナカバ）　ゲ　するようもうもうこ　出現（ゲン）　するなり

一こもうもうこ　濁鈷（トクコ）　一こもうもうこ　史婦（フウフ）の

中ふけいもうもうこ　ものもうもうこ　ものもうもうこ　ものもうもうこ

一こもうもうこ　ものもうもうこ　ハ源清（ゲンキヨウ）　蓮也　心もうもうこ　れ是ものの

もうもうけこもうもうこ　ものもうもうこ　ものもうもうこ　ものもうもうこ

一こもうもうこ　ものもうもうこ　西洞院（ニシノトウヰン）　ものもうもうこ　東洞院（ヒガシノトウヰン）　ものもうもうこ

一こもうもうこ　花（トウ）　登花（トウカ）　殿（デン）　ハ弘徽殿（コキデン）　のもうもうこ　梅壺（ムメツボ）ハ又登

花園のうつしあらいづれもうれしき殿舎也むまれうるとい
ひとり月人もすまず塵よむまれうるも
一ものの名ふふふとうたげうるもの花鳥夜明すうを儒人
乃をうへうあれ庵の前うへてこはげうれといへふ必べしと云
一うしひとけと戸 花鳥 小山羽抹物云宿中 実子時 左陣 毎
朝夜行 丑寅朝 右陣 勤 丑刻 物節 一人中 宿中 姫
由云略
一友ちどうる 武ひとうとうへいよ鳥い友をつれてけりとれ世さのも
しうたふ深もと数の人をとうもちるふ事もやあんとも世
一ちうひ 知人也 一とぶやうに 飛鳥也 ちやうも世
一ううげいうけうしき波風 年十三歳の時 遣唐使 りて

波斯国 到 用琴壺 孝行の者也 阿隆羅琴 を造てあ
へ一度あう花うつりの拍子うつりげうさまれて
うへけるうへうへ悪風 まりいて波斯国行 又梅檀 れ下る琴
をうしておそぶ処 立て琴 とうし極て うう霜 とうも
天地をうごうす 日 ひよへうへうて石をあげうる也
一うれうれの節会 宇中の節会也
一ううれうれこの笑いをへうへ親 ら違う也
一年うへうへうて家のれうて 落雲 係間の夏三月まで也
一あうの大こやう 大政大臣 内大臣 新任 警の事 沙
一ううゆのまれき 節取 由也 ゆの者也 左のまうて 張
う事ありべー 一うう 年忌 一流 うう

十三ヶ月と云也 一年満也

一年月へだてゝ申れば おうざゝ

一タゞかれし 河東摘巻 月出づゝ夏とかん海 ほん多

ゞ日の事とかゝる

一哥 うゝとゝて 哥の心面白く海の

つゝの夏と 勇ていうゞされさいもいまわゝ けるかゝ 夜盗の

ゝられるば 神とつゝゞ ゞふゝんゞや 盗ゝ ゞふゝんゞ 忘て

ゝられば 心けゝまゝゞ 河ゝ書 哥ゝ 哥ての哥を

我 哥ゝて ゝゞ 盗ゝいゝ やゝ むゝめゞ ゞ ゞゝゝ

ゝ云ゝゝする也

一哥 月を 拾遺集 ゝゝの類

あゝ月哥 松ゝ

一島のゞく 芝やゝ 島も 一 鶴

調 糸や 島の糸 感ゞて 芝 鳴 ゝ 池の水 島 物ゝゞ 也

一ゞけゝゞ ゞゝ 近 海 を 云ゝ

一物ゝ ゝゝて ゝゝ あゝゝて ハ奥也 貴ゝゝゝ 心 ゝゝ 外

也 ゞ ゝ ゝ ゝ

ゝ

一ゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ゝ 芸 家の宝 有ゝ 内侍のゝ

女の宮也 宣旨ゝ 内侍ゝ 兼 宮ゝ ゝ人也 れ 湯 ゝ ゝ ゝ人

べし

一年ごとに 芸 秋の 神 ゝ

明石入道の孔ゝ 毎年ゝ ゝ 神 ゝ 毎 ゝ 外 ゝ 孔 ゝ ゝ 以

ゝ ゝ ゝ

一ゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 替 左 ゝ

こゞもの変也

一時 ゝ ゝ 雪霜 ゝ ゝ 河海 ゝ

ゝの一ゝゞ 琴 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

芸のゞゝ ゝ ゝ 今一 ゝ ゝ ゝ ゝ 六月中十日 ゝ 松 ゝ 雪 ゝ

ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

たべいたづらさせもせずこうはこれを門の引出よりなげすてゝ雪みちをつくりたるこゝろをいつまでもかくしておやしきへ入のけえぬ云

一らうもせずれば幸れのせまりうる心也

一ゝ汁と　柏木後三幸よりあり也

一らうのせう　源氏論代記也　注記書いふ雄大い雄雄ゝ

ゞゝゝくゝと書を鳥ごいへる

一このおすぐるゝゝゝ髪とさけうゝ海ゝさゝづゝゝ来

常ゝ紙り角童髪ゝ人のすぐゝゝ

一鳥の巻も　正前ゝ一島不明山更衣山ゝゝゝゝ也

一ゝゝゝゝゝれて不動也　一ゝゝれあゝ辰日也

一ゝふゝゝ　常盤ゝゝゝゝゝ

一ゝゝ代ゝ　十ゝ又ゝゝ

一ゝゝ角い　灯臺

てゝ用ゆゝゝゝゝの女一のゝゝゝゝゝゝ

一ゝのゝゝゝ　ゝ髮の

の宮を呼髮常の髮也

源氏目録巻第二

ち

一長恨哥の代ゝ　白氏文集の内ゝ　玄宗の楊貴妃ゝゝれ

のゝしゝも今桐壺の代門の更衣ゝゝれゝゝゝ

一長生殿　玄宗の代髮の名也　桐壺の巻ゝゝゝゝゝ

ゝゝ一ゝゝゝゝ

一ちゝゝゝ　家ゝゝゝゝ

心也　家文ものこと

一ちいろさも　みちのふ陸奥の国の心をもつてとする

紫上やうく　ほとゝぎす心ある

ちやうふぞうしちゝ　延喜式云　凡齋内親王除行豫定

監送使　参議一人　或八中納言　弁一人　史一人　六位以下官人一人

兩国交易　大臣着陣定　前大中納言　参議二人　四位四

人　已上勅使中納言　参議各一人　四位六人　長奉送使中納言

若参議　弁　史中務丞　各一人　已上義向下外記云々作式

云々　花　今案群行の日　前に勅使　何原　供奉

して帰参　長奉送使　侍従　殿　上

の特弓場殿　すくうて　ゆゝしくれ下着の由を蔡門

ものれば　戸口　兩職事　作法集乃

一ちゝのゝ　孝経注　執政臣致仕例略

牙の内を引　七十老　仕慰其所　車

仕ゝ　七十　出仕　ひろ

一ふう車　先祖の廟　懸車の

齢　官　政変

何海　ものれ

一子校　千校常則　左高右保共盈工也

一長恨哥　王昭君　楊貴妃　馬嵬　王昭君

独　仍　治也

一ちうさ　手左の　事也　柱琴

一ちう琵琶をてぢうと云

一中将のそのはかられまつぶひ

六月四日と荒手番六日と云る花手結し右近乃

真手結也六月六日よあるれば夕雪中将右近ちうの

とのこどもゆ引つれてあるんずる由ゆ結也手まつぶひ馬

ゆきの時二人ぶ行て射る事歟

一ちうぐんよりちゆべきいづ方よりつる心也二仏の中乃也

一ちうすきちう 遠ちう也

一ちうき 地鋪ハ唐錦ゆ大敷

一ちう 快賞 書物の快也

一ちやうれんつぶ 院の廊のたぐのうしろ

一ちいさくちうを 乳也

一持仏 持仏堂ハまぶそ

へちうべ

ちうれんを云也ちうぐちう心

られこれども先仏供養の用意也

一ぢんのつよい 棚也ちんハ沈也

一ちやうしでの丁子薫香の品

一ちうさまもと 近衛大将

一ちうぐまうこれ ちうもれ

一あらほい 玉ぶくるる系ちうもちうほいさくちうにまぢりる心

り

一りもじれまてあそび 何ちてもちうぐまちうるかの事をする

と除時ちう云也

一りもじれ祭の頃ハ於義乃

一除時の祭十一月よあ系事也前日ハ中の酉也是を小祭

ち云也頃ハ年日也内裏

一りちれちうへハ律ハ秋をけうきぢう安も秋をつきぢる也

一山ざくらは十月なれど冬は秋に属す

一柳花苑　上古は柳の葬也　今は梅なり

一りんどうやく　客とさうやくぐらべ　亦条院大臣ぐら

　陪政の職を兼ねる任なれば　ぐしへていくるや　四月三日の

　弓客人の乱　まれなるとゆくち　好茂　うるさいぐ　用

一雞頭　鶏首　竜は水をこうるる也　鶏は風を心ゆるすや　故

　心形を作る也　一りちをばつぐれ地　うしうる

　ひとちと次呂は春律は秋也　日本は呂律　唐は律呂本は律呂也

　云律は陽也　呂は陰也　故ぐ　償るゆるは呂律こりて　律とあ

　すう也　春とまきれとこ　添氏ら　作心　弼曲　償るゆれ　ち

　ねのいうく呂律と律と次　よすうちう　償馬　あるは呂律こ

付ちと本明　冷偏のわ　ねるこ　呂律と陽陰こ　用　云

一りんのも　ゆ　弥義　ゆ　引と　ひんのまこ　云也

一ぬさすべし　ぬさすべ　ぬさうしうる

一ぬのぐく　幣　額突　礼拝也

一ぬさ　稜麻　撓て　道祖神　ふる　何ふる也

一ぬもてまいれぬ人　添のつぐ　ぬと　ぬ　ぬ

　さ　ぬくは行給也　一ぬ　ぬ　賊貧家　うつぐ

　うちと云也　一ぬさうけうる　指地の衣　ぬ

　そこ云ふ叶へうち　一ぬさもあへぐ　玉は糸　て

　ふう祈也

るざこひかれどもぬさこうの玉の代なれども

る

一ろかぶ　玉ぐしの童名　一ろい　親類や

一ろてん三ぐいちう　流轉三界中恩愛不能斷・弄息入無為

を

一をぐらめいひをごさんとする心や　陷

一れは夜ごもりすぐして　夜者專夜晝同輩　長恨　やぐそ

ちつくせる・文衣のそのまゝおのみや

一をさそそれいそくひう心や　何　捉

一れうめ夜　納夜　在陵涼夜　法ぐらうまいり拍とおさまり事や

一をよすけもそおりすう　物及　成人の器

一れさうそ、まゝ　蓆や　蓆

云や　愛石

一ぐうちかどくし　御立　日本記　俗よ親だうこる

どいこ京心や

一れも　袍や・袍る山物紙ようぐ紙おぐさおぐいへ

一れはやけ　乞

一れぼして　ろうこいする

とぼぐさうるぐ云ろうおぼしぐぼてもくいる所も

不よちうし心うべし

一れりまう夜の京のひうし

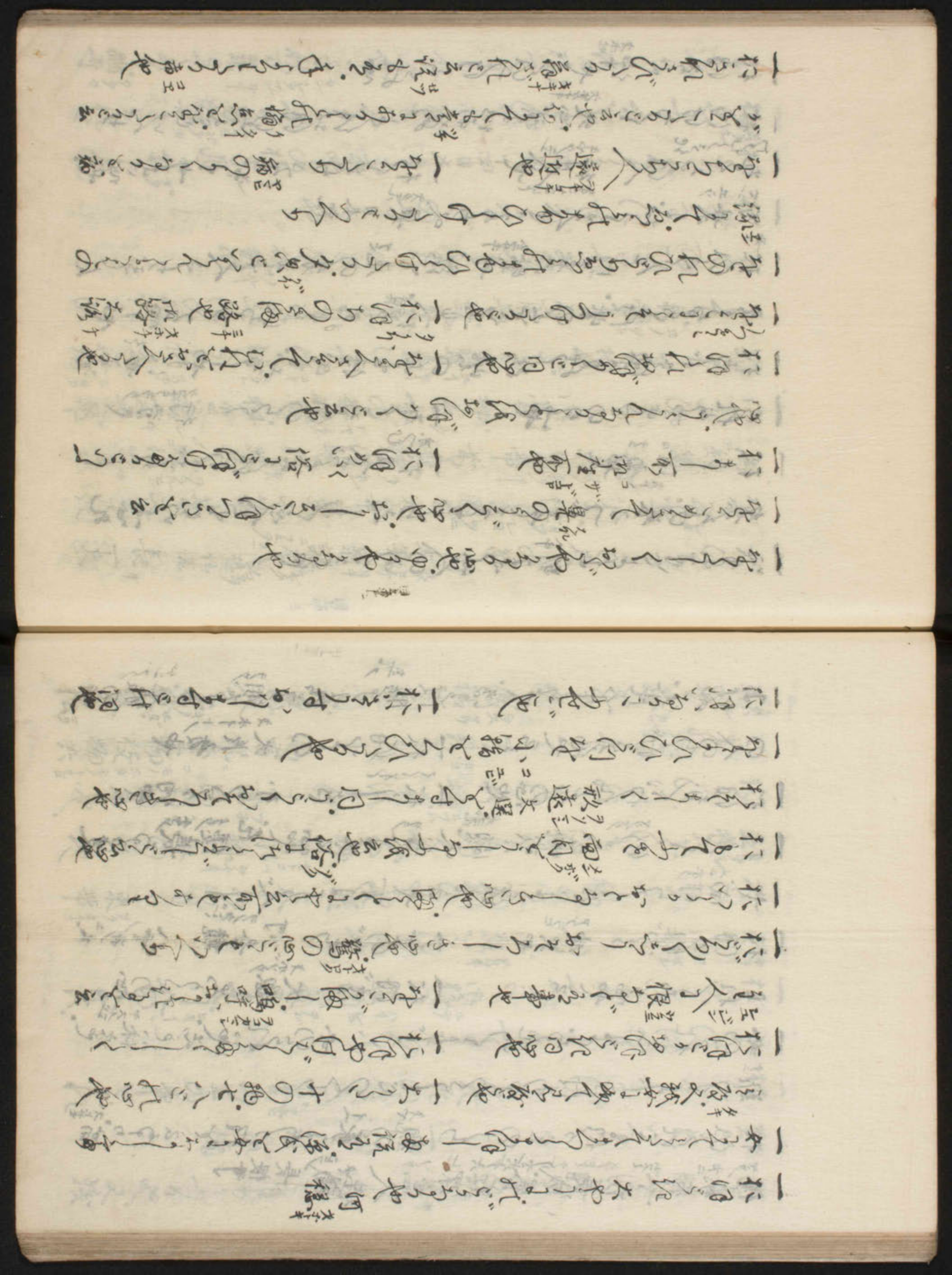
清淨夜やは夜ごこも云や・東庇孫びうるべし

一大蕊つくく人　蕊人のフスの大蕊つど云心や・二人こそいる

一れぐそそちくて　元服　前ハ赤袋の袍の勝ぬる

也。え眼は浅い腰をあひて、黄なる袍を着たるやうなる、又浅
黄ごろもいへり　一れいは引紀れ源
一れいぐ〻ぐ〻さばき　右大臣の源氏よ、愛の上の事をされ
ゝにはのあ〻めるをいへり
一れいぐまのわかめ　れ糧の盃酒は、義工うて、小人の大臣は、
更まれ前こめ〻てれ盃を引りの也
一大うちき　袴ぐさ　是は大小あり男し束帯
亜衣ちぐにも大袴いふ　袴は男小御は女のさる也
一れいちひはまこれ　打槌　まげうる常の打の事也、
こまれい行てゝうゝ　鈴ある〻べし　西宮記云本物校物共
菓子や　鈴をくゝて　落梅をゝさゝて、菓を入て、木校式を仁

ゝ紀　大臣　年れて、落ゝ付膳アゝ結ゝ御ぐゝ元れの
の人のちげうる也やゝ　一れいはの　大臣貴や
一れいはおく〻わんぐゝの心也　一れいゝ〻ゝさ　かゝゝる何や
一れいぐ〻　御ご云心、或い頗、又い更ゝ云心也、花優長ゝる変
や面白ゝ　ゝさゝ紙も云也　有ようゝ〻し
一れいはゝれゝ　油炬や　一をのゝ　何　各競　八雲抄云、
ゝれくゝあゝる心也云ゝ
一女のゝれ　ゝもゝんつ　一れいはぐゝ　大盃　大ゝの心
雖つくまゝ　さけあゝ
一れひゝれこもゝゝる云のゝ　ゝ　親の家　ゝあゝ行と云ゝ、前
揚家有　初長成　蒼在深宮人未識　長恨歌



一花はきよ作(オホセ)せ・いひつけよ[illegible]心

一花はけ[illegible]ものあ[illegible]はけるさ[illegible]いへり

一[illegible]の人 行人(キヤウニン)せ 一行くまちうおくすさ心せ・

万葉(マンエウ)・おくまへ[illegible]あり又奥(オクヒ)日本記

一花ひらん 万葉(ヨロヅノハ)せ・綿と尾(ワタ)の男よ[illegible]へ[illegible]うつ[illegible]

そ[illegible]ものさ[illegible]紫のよ[illegible]

一花ものさ[illegible]ふ人[illegible]ものさ[illegible]心[illegible]

[illegible]れ[illegible]ものの[illegible]せ

一花[illegible]れ爲(コレタメ)せ 一花[illegible]へ[illegible]ものし

[illegible]の巻[illegible]

一[illegible]ふ[illegible]

一大ひちりさ八の苗 河(カハ)大筆(ヒツリキ)・藁詠(ワラヨミ)尺(シヤク)・徒(ヒツ)紙(カミ)長一尺八寸 故(ユヱ)・書圖(ショヅ)云・大筆・藁・小筆・藁・又云尺八

爲(ナス)・短(ミジカ)・篇(ヘン) 玄宗皇帝(ゲンソウクワウテイ)・前身(ゼンシン)羅漢(ラカン)せ・好吹(コノミフ)尺八(シヤクハチ)・被(ヒ)・擬(ギ)・出(シユツ)云

一れ[illegible]ひそく れ基(タイ)・秘(ヒ)色(ソク)・今の茶碗せ・秘(ヒ)色(ソク)ハ磁(ジ)器(キ)せ・雖(スイ)

別(ベツ)[illegible]物せ・[illegible]

して・弱常(ヨノツネ)・不用せ・故(コ)号(ゴウ)・秘(ヒ)色(ソク)云・[illegible]

そくの[illegible]・今藁ひそ[illegible]

一れ[illegible]せ[illegible]

一れ[illegible]せ・正月十四日・大日よ・京中の[illegible]月よ[illegible]

指(ヒツ)[illegible]

[illegible]代[illegible]

先学ごとつくり花鳥 初音の巻了 系

一 おびたゞしくとうと 上の御ぞあるべくんべ 衣は生ぬ
をとゝ云也

一 はゝ衣どゝゝゝゝゝ云心なり

一 はなはだしくかるい三月 尼公九
月は卒去の方いこゝ月の服なりて十月晦日は除服也
ゝゝゝゝ也

一 はしゝゝゝゝ事 相帝也

源氏のれはゝゝゝゝ語ゝゝ也

一 おびゝ中将のゝゝゝゝゝ

さろうへのトがきれをまちわろい略儀ぞ云し作り

一れはやけぐく地ぐくそうしてぞ日ぞて切宮殿貴者ぞ

ようり宣下のぐぐもうけ給ぞ云也

一をぐらぐぐにちん　我のはわちわぐぐうれはせんぞ也

一れぐぐ　臆病の心也　一れちぐし　源氏のとばとへくん

と美妙ぐぐようてれのぐを入ぐぐ也

一大ぐぐに　公のすぐぐ源や心をくい心をうぐぐ心也

一れ法ぐすぐ　常れ袍ぐ指貫を着して裾をりいれつ

れの皮や直衣ぐ裾をりいれぐれ出立ぐもつべし　わ

ざれぐふれぐれぐいつもその心たがはぐべし　塔ぐ王の字

也　六人のすぐぐ云心ぐ又直衣ぐぐ刑部ぐぐ

角ぐ云ぐ続ぐ

のぐぐぐぐぐぐ時ぐぐうぐぐく故作也

一れぐぐ　男ぐぐぐ也　一れやぐひてぐぐ給れいも

庵　村ぐれ女親ぐ内親王天延三年ぐ決定ぐて下向し給

れ母微ぐ女王童明親王ぐのてぐぐぐぐ地紙ぐ六条

れ息女ぐ微ぐ女王ぐれぐへてぐ給れぐれぐれぐ母子

あひぐひて下向の例ぐぐぐぐ給れぐぐ也

一をぐらあぐ　赤通女子百　サ女　日記　乙女

一れぐぐあぐぐぐぐ僧

れぐぐ八雲　おぐぐあげ下女也　ぐぐぐひぐぐぐ上ぐ家

中ぐ物作湖ぐ下女也　不浄のぐを生母の清二幅どぬひれて

日上四上五

一ぐぐ　おぐぐ　源内侍を源氏

あの端を結合て、ぶ丸とひらこうけおもやぶしもやひもそもしど
云、雖也
一れは文政 秋王侯京の時、大和
路をへて、摂津より越て、紀州へ渡りてこゝへきて、七日より大江の儲所
より始、十日より入京、給也、故に大江殿ハ秋家敏家ハ旅館也
中代一家秋家の旅所なりしハ蓋多くこゝにくるや
恩賜のれ衣ハ西こゝ 去年今宵侍清涼 秋憶詩篇独
断腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拝餘香 聖廟れ作
一れそハ分をこゝれらず れ門の源よりでゝ来る変ハ前
こゝうるるれど、給り給しどこゝ
れはい殿 大炊殿 新様示記 巨炊屋 旧記より多、大炊屋と書也
一れ門こゝれ、来雑院のれ月より、ひ給すも、三条院を

れ門こゝひのこゝよりこゝるへし
一れはこゝれ星の光と七夕祭より多院のあ氏登上りこゝて、
星のひうをうけしてこゝるこゝ
一なのこゝこゝりつけこゝ 身こゝ
一れはれ 五合 をこゝこゝ
一なのこゝえこゝへ 音手賀石室出鬼数章より囲碁手賀一物ハ
来校合之不飢局手終 斧柄尽既面無復時人
一れはこゝあこゝび 大れ種也 一れはこゝめ 松風の巻まある
き根ざこゝあこゝあめ氏こゝみめへこゝ
一れはこゝれこゝ ハ生也 髪こゝやしこゝ
一れこゝねこゝめて 牛車 元中納言俊三位れ位こゝひて八ふのこゝ

一九条大臣ちゞ一位に成給ふ也 後一位也 聽年車也 寛弘八年八
月 左大臣菅原朋臣 宗年車入 侍賢門上東門ゆ云
一たゞひとりけるさ 所れ申すぐる とのゐすぐるハねるさすぐる
のゝちゝ
一をびれる おかびれる
也一説大やうゝ心れ 一れゝ ぐゝ ゝてゝりぐゝそ
各留 半座 宗華 臺 侍 我 同浴 同行 人 法照禅師 公魯渡
一をびれ ゝまゝぐう 弄 羅 進 人の通付ぐゝ 心也
一れゝを おぐゝ 心れ ゝる ゝ心れ
一れゝ ゝ ゝ ゝれ 九宮 早下 ゝ心也 ゝ
ハ位下の云遊云 あゝ 大饗 ぐ ゝ 人数の れ 交 云
ゝ ぐ ゝ ゝ
一れゝ 故大臣 関大臣 轉右

政大臣 例 忠義云 ゝ 外 ゝ 例 多法 拝 ゝ 要
一れひすぐ 次第 ゝの心也 ひぐ ゝ ゝ
一れ ゝ ゝ ゝ事 ゝ
一れゝ ゝ さ 臆病也 不学 ゝれば ゝれ ゝ
一れ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
一れ ゝ あぐ 孝経曰 満而不溢 ゝ ゝ
一れ ゝ ゝ ゝ ゝ 左右の騎射云 也 中 待 不射
也 六条院 ゝて ハ 相撲 ぜ 馬 ゝ ゝ 的 射 ゝ
一れ ゝ ゝ ゝて ゝ ゝ 源の後の名ハけ ゝ
関大臣 ゝ 云 ゝ 悲 ゝ ゝ ゝ 呼 ゝ 名也
一を ゝ ゝ ゝ ゝて ゝ ゝ ゝ 大業 二年 若得為人 聲亡 目瘖 痙攣 詩斯

経故羅如是（注花）

子游問孝子曰今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養

不敬何以別乎

一犬馬の行事　延長六年十二月廿日犬馬の行事を横ー

一家のうち花鳥委略ス

一行れて手のうの用心

食つくるは私ちうを立ちけてなきられ云用物のこの

職ぶちにーいぶちうはちくちちやくされども人ぐ

ちもちうでどちう

一ちうちぐちう多　落葉多や

一ちさ紅の稽ちこ云ふ仏法ちを説き紅葉の掌のちうちちや

一れぐくも山月ハ三月ちれば心月廿日ぐちうべきれ　花山法皇

一のうちやちぐれけう伝　論語曰

一をちうあひ行て　風病多や

一行れくちさい　ほれくちうさや

一行ほやけざ後ちてちう不

一ちうちぐちう多　落葉多や

一行ちぐちう多　落葉多や

一行ちぐちう多　落葉多や

一行

一おもてなしてぞ筆は　下筆は書事やおもすくはうらめ
うきざまなれどさうはかりまことたけうれのみ心れ
一おほぐれづくづく　切灯臺うてうづくさうる
一女のくくうてうんくこつ紀人も花　寛平遣誠よりた大侍　時平
先年於女事ニ有不快ニ　一おほいまうちぐさ　門府はた
改大臣ればおほきおほいまうちさことうべきとおほいまう
ちうさみうさのことうる仰うれを日事とうんう
一れそのつくるを十二そそくく交冬くのれうさひ花例はりのんう略て
一なうさう紙のつくるをうけ河　置物机　唐羅　朱濃霞
一れ伝よつをものて十八年寺　十八年ノ上位清和天皇の例也
花島弄花ノ妻　一女は妻とあうれあとあうさんの

女歳陽氣春忍男　男歳陰氣秋思女　毛詩
一おほくのさをとうれ四うすくうつのくげうせ
一をうさうてひうさうけ紙人の思うけはたんてのうら
一おうさうてゆくそもうれわ　山寺おうてはとしうう寺やいづ
くれ文字少仮やうてうべきやこう私云山寺の法句なう
一女の分いうれおうづつうあうさ　我も人もおうづつうあうさ
人は女ごとや　女人為業障　涅盤經略
一おやのけううもやうれあうう　親の為ニとうろうしや
くくうあれうう春さうくしうんう
一をうくゆくをうんう　帝の御　清涼殿あうべし
一おほやけのうさ西うう　近衛大將や

一 [illegible] 一夜ねるあひだ [illegible] 一れいこれの行ごと 竹しをの葉が
世上うたいそうでもや
名姓のこころばのあらう
あつう 入唐余習 [illegible] 新 盡大城 方便品
一 [illegible] ひとこと すべこうけ 摘と罪うばわう
一 夫ぞうこう 鳥を幻うして 術ちうこう 巷の川水を [illegible]
一 小忌うして 青摺十一月 [illegible] 日新 [illegible] 日豊明節會は
山あねうてすれうどこと云 [illegible] 茶すうち
一 れ佛名も 義和 [illegible] 十二月十九日 [illegible] 云 今は吉日 [illegible]
一 [illegible] 原の [illegible] [illegible] 柏の [illegible] [illegible]
[illegible] 畢竟 [illegible] 理元

一 行ってこば 茶をちくこ [illegible]
一 行ちあづれて おちこづれうる心
一 行ほ 王氏の四位せ 八月 [illegible] 結 [illegible]
一 行も [illegible] 行 [illegible] 仲元
一 行 山の 松葉の雪は [illegible] [illegible]
心 [illegible] 松葉の行 [illegible]
れも草 [illegible] 茨 [illegible]
うこと [illegible] 茨 [illegible]
き [illegible] 碧 [illegible]
一 行ってこば 日枝は姫 [illegible] 妻と [illegible]
[illegible] 大 [illegible] 妻 [illegible] 心は大 [illegible]

女人説法不易齒矣不覩智慧乃至出法不親尊顔

後餘事

一れうの行や

一ひとりぐらと云ふ紙〻をいらのてらされや

一をの〻と紙納おくどつるおちゝ

一をの物をろうちゝ老や

一をいこれいまゝて思いどる心わ色や

一をの〻已ぬや

一たさちるゞ川奥中川又奥ぬ川

一名ぬや

一ぬまく侍者如と云成法門

一ぬどちゝび生ぬや

一をどちゝひ為ちゝや

一ぬ法ぬ為大悪已ぬや

一をゝひれとそれびれや

一代いまちく

一れ地獄ぬとゝむ所

一あちゝ文れどゝむ所ちゝ所のさゝゝちゝてゝむゝされ

一ぬほんべ聞へや吉今ゆゝべゝとゝ大聖舎るや仏をまちる心

一ぬひゝれ老ぬ法角ゝの図案のゝをれゝれどゝを

一ぬ法をゝちゝけゝちや

一大悪ちゝさ大ぬちる心

一をゝちくゝち百ぬ夜

一ぬばちけるゝば不ぬ孤

わ

一わゝちく何無別日本記無破

一わゝゝれ ぬゝちゝ廣ぬや

一わゝゝく外発心

一われゝれゝさ れを紙ゝいあゝゝ魚ゝる心や

一わゝ愛や

一わゝん 伊勢語伊勢物語

のれ時、今作出ぜんと、楽器の家より出たるあり、琴あり、つまびくもいかにや、暗もれ記云、和琴八元八弓六弦と、引並て開けると、後より琴を作らるや

一わらうあると、哥代昇平や　一わらハやミ　疫病　疝日て世俗よをくるとゝ、くるこれるゝと

一わんどくとる　王家に等倫王孫として、姓と不賜平人也

一わらうへいるとゝ　命婦まいりゝ時、体臭すゝ扇るや

一わらきもれい　幼者殿不蔵老者躰無温悲端与寒気

一侍入鼻中に辛ゝ、ゝあるゝ

一われのれゝ、まゝ　山陽式河海花鳥春暮　御門書

まへゝゝ様をゝて、被主の顔ゝ、て第九方ゝと

ひゝをゝ、作ゝあるとゝ

一わゝゝゝ後ゝゝのゝゝ　ゝやゝ八ゝゝまゝゝ

ゝ、深ゝ来食ゝゝれて八ゝゝ居ゝゝ人の伊人ゝあ

ゝゝとバゝゝとのゝゝゝ致仕の表なゝて隠

居のゝゝとゝゝゝゝ、ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝとゝゝゝ　一わゝゝゝ海八海乃

ゝ名ゝ、ゝ一本ゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝむ心ゝ、蛭ゝの足ゝゝゝゝゝゝ

一わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つけて、ねやうちかきまゐらせ給ふ心や

一わらべてらくる　一ことに八条へとゝむらせ給ふこのゝち

しらせくらして抽ぬきそゝるさに八条院を祝ぎ云ふ

ゆゝしきもそれ心や　一わらはあをと御のかざしうづ、

ぎれのあるあをあをれうるに八御のうるし紅梅うるれのお

うあとうるうや

やとて紫ゝあくこしうるゑや　一わらはゝ長ゑる事ゑハうら

代の時、花象と左遷をうるゝうるゝるこゝ孔心　一わらくるまを　本朝ゝ代延聖

一わらハけて　長童乳や　おうろ行うるゝ孔心

一王女れうて　王女れて王孫をゑや　条雀院皇女昌子内親

王令泉院女れ世ゝ稱王女四ゑ孔王女れうゝず姓とも

昔ハゝひけや　女れちどゝ　一わらくるのとゝ

ひうるくき　有五家髄髄又演成成ゝハ寿七病喜撰式ゝ

八出四病涙姫髄　有八病是等や

一わるうるうるうけわるうらて内蔵寮ゝ関侍

長人ゝ系階のゝるのて拘むくて音演竿舞童竿結下呼

命付影ゝれハ不詳ゝれハ六条院ゝてのゝ縁ゝ

ゝれ用さ後ゝ孔ゝるとつて重ゝ結ゝて一十

百千万ゝうて袋ゝのて紙略ゝ哥ゝうゝて

ゝのゝうるうる　一わるかゝ　ゝの髪や

一わるゝやゝとゝふく皇慶平潤や

一わるて又ゝゝ四月天気和且清涼隠陰合泄堰平　白氏文集

一ワラハベ　ちゝ和のすべ
一ワラハやとれ　敷の多こゝさハゆゝしの心や　芸はなこハ家のすれ
一ワラハまのり給　繁の南日　みは　和例多〻源氏のれ　葉を表
葉まて　伝給や十二行若葉七行若葉　行海表
一ワラハ　葉さす　まれ　若れさハ　深と親　てゝ　拾ひ一所多
れハ　ゝ　ゝ　ハ　ハ　ハ

行為業何無慚法師或懺悔

一われくて身の中にあるべきかと可心得

一わるべき業なり　一わけもなく無慚

一わるもの虚偽なり　無慚

か

一文字四位結女の恐者也門の内脇をかくすあり

一ひのふんちるようにて文字とかくと

一かんちめ云御也たたたにたべけれとこちら月御

とかもと云御也　一かつてき寵愛する心也

の字也文冊　一かつてきれ代可畏

うい中に本紀恐心也れげ八夫るれ

一冊のうちにて御一ことハ生死也命なかるとと

の心也　一かつちべきとも禁中にて

文字のうちにもちるんとかんとんとかんとんとも

一かつてけるとき　一ちとかとれある心也

一かつてつ恐れ　一かつてくるに頭元指

一かべとうてべてもあるてらべられ指らかとて

心也誑　一わるみ何記念極仏信文集

一かつうるやと文字のうちに大なる人は送られども

文のうちにて　一ちうるうちを

一かんさ金叙　一かるうちうち

無慚

一 かんく 都やうぐ 日えんくあるべし

一 かくやくひの事 一条院の御時 上東門院の御入内 ありて 花壇 まいりまとくしたるち 業兼 絵 まいり 当代のもの出

一 ちゝ子山 絵 流 て 多し

一 かくのみ侍 侍 ぐ めれども

一 作物 絵 ようの〜みねらるあるを 凡人 ぐ ありあるを 多 この事

一 さ 光源氏 ようの〜みを 持 と 同 時代 ついあ〜れども しかも 或 多

一 ありあるを て けりや 実 まで し 一巻の序 序 や

一 かくを 頑 一かくを 庁方 庁 庁

一 かくづくひけちふ心や 一かくづくひけちふ さあるる 事

一 かくをかくる 上のふとをうるるを

一 かくれぐうあれども 一かくれぐうあれ なほど

一 かくやうぐ うやくいたづら心やぐちくやうあ事

一 かくつゝにしあぐど 一うどあるや

一 かくうして 章 一かくれうを 多 ある声

一 かくうん 桐 千 おぐ 海

一 かくめうう心や 一かくるあ しかの面 を 悩 ぐ

一 ちゝいくを

一 あ ようあらへうを 中門 の ちる 海 ひのふとや しかも 奇 を

一 くきを 作 を それ 系 ちる 美法 信法 面 の 墨 ちる 名 系

一 やその 森 の 事 を ちう ちれば 筆 事 紙 てさぶやう

一 て 近 くられば それる 作 ちる あ ちる 松 ない 奇 ぐ

一 付 てあ あ とる を 等 ない 人 九 の 奇 始 れ

一 合集 物 あ て て て 付 き ば ま 紙 ま ち を ち 人 ぐ

一かいまつ　坂ち見　物ぐるしうてうれしうてうれしうてどういまこそ云也

一かいまつ　且や　くと云所もあるとあるようべし

一かどい　上とみのやうなる　今も門をあけおろしする小家

のさまや　一かさ紙をさし傾ごろして

中門のさまなべし　一かるみかるとぐるま　行帆

真帆といふねもういでうるやうるやうるやうるやあしうるやう

一かづらされ神　大江とさしてうづされ神さ云也　山神橋

とうけのふめくるる　一かべのうれこうらくしく　義

毛詩七月篇云八月在宇九月在戶十月蟋蟀入我

床下

一かぜ　弾　夷人弓勢まるまるれちう

一神事　九月八朔日うを内裏の儀ずや三十ケ日を

織ようれ給ようを年内叶ずこそや

一かうをのくるうちけうをいうるうれるようて

とうやくくあるけうを紙うるけうちどいうあるべし

一かうち　かはいま云数の跪座の力や

一海説まの伝　説まの素あるれば居いうん勿論や　昔

大音王といふ王ようあうけうさあ紙ちうけれを

国の王四人いるもうれをえんすをのぞけるねよこの

如ようをぬうの王うるうちどうひうもむうあうめいの

うるあうて世七万八千九百星をあて　ようぐうう

のうるその説をうれとうて大海のうるうをけうこと

とぞ。父の王ちゝひよ。色國の四人の王さま。ゆむしうひて
うちゑしゝうすき。吉祥天女のかゑ。又安鎖
龍王の八歳のめのあらし王の妻なれば。后といえて
わ遠ちく侍り
昔八尼と云ひ。髪をいぶ。
一わ法いあくすちるして
一かんぞ　おさる仏は法はうんぞ。ゆ。ゆ。あけ
ちゝ。ぞうけてうぐ。
一やうある人の志ゝ
ちなき世の男も心のうきあ思ひて。まうゝされ
一かのちぐうあんぐよ　業よ尼ゝ。源氏のゆるをゞ心せよ

の。ちゝと。源氏のくちのひしゝゝ氏ゝ
一かのちゝまを　源の小紫ゝて。ゆめ。尼ゝ。ゝ尼ゝ。ゝ
ちゝ。ゝ。尼ゝ。ゝ。ゝ。

八講ゐどの論議の時、講者、ねどいへど、威儀師、磬を
打ちしき、そ後は論議をやもちやそ心ともせずゐるし
一かうもひとく　ちくしうきもそ結そ
一かとのうとぐもうち場や、こだわど同すやしもも体
なや
一かくゐひ　ゐさゐれ人のくいちちちさ面や
一迦陵頻伽　聖王天中天、伽陵頻伽、聲、法華經伽陵頻
伽在声勝衆鳥　云云或迦樓賓　或云伽陵頻者梵語や伽
陵いこの中ちゐるこや　一神ちくそよめていくき
大後云いうくうゐくといやて同名延長の大井乃別
事ゐ富小路のれ息方のれ脇の親王の七歳りて舞まし

ゐせめくらしけだくちのすこそ上くゐ方人しは
くれぬ人ゐゐくさちされうくちひうゐうくそ
ゐくをおひしくうくゐ山の御ゐ光でくとそとけう
一かいもちろ　舞楽と恒のやうゐ立光ぐうくをいを恒
代や、数図や、四十人のいくろ、也秋で楽論云四十人乃内
有序二人破二人恒代三十六人そ、山ゐれまもれくうそ
といゐる、必しもよせちきのこを輪蓋の物作とて舞蓋
上ゐ丸立めぐうや　一かざしのまみち　舞のうざ
しゐいまとの立年れ殺ともゐ乃ち文れちゐをもうざすや
ちう遊ゐうどあれぐこれ、音れ紅葉ちうべし
一かんぐちめくちいこれ　ゐれ官をすくむをいくち

一かきあつめをどろう　調ふとまつくろう海をいろう
一かしらう　蝙蝠をうて扇と作初けるや　事の扇や　仍為扇
の異名や　捨箱　あつめ
一かくさうあるとうん　定れつ　中ようくさう　親行かつし
又ちをどつひうんうう　女院行色　御年や　鄭別のあのう
山伏　天の　すとうや　文　文　草文君　白頭吟と云
事とけうてあれば　月　物如　これとうて　衣とこけうや
一かくれちうさ　ちとう　すさ心うは　後さ心うや
一かくちといさうにもつず　花　鶴　高　はれ　ぐうて　事
系ちう　仍天　暦三年　三月十日　二条院　宮　陽成院　事や　月
十二日　四裏　行寿　義　宮　各有　事　系　郎　養春　宮博　又

比丘　伶人　ちうて　衣上の事　八　紙　紙のちひ　西
乳もあれも　あるとも　ちうとう　ちうや
一かうともえうやら　守　侍所や　秀逸　なうと　毎　盛
どてうやず　俗しの　ちとつくうん
一かうつくさ　ちくち　ぜつ　ぜ　ぜ　ぜ
一かくうう　うあるもを　ちうハ　仕　ちうう　ぐう
八上霞のうや　呼　被　衣上　ちうする　ちうと
一かうけ　豪家や　うんまんがうすとふや
一かうのどいどうんうう　衣上のうう　なられる事
衣　この　衣上の雑仕や　法師　ちうとも　ちうず　そうとも
いどうとう　一貞　なるや　近衛の　盛　将曹　府生

一人つゝうちとりあつめて、つゝ人をいましめ、戰コ
もつて隨身とする所つゝ、ハ、そうちあつて、出仕のうへ、
るのゝくすりをもて、をかゝ時、ものゝ、ちつて一人げゝわる
を紙、ちつれ隨身といつもの、俗令納ゝ大將軍ハ、たゝ
公の番長二人と、清水人、すゝて、京人の隨身をゆるされ
てゝ、ゝすゝちそのうへ、くるゝ、輝家ちゝれ、ものゝ、物盛物書
府生と、一人で、奥すゝ、紙、一貫ゝもゝつれ隨身ゝもゝ云や
いづれもゝれ地下のゝもゝ、もゝ、ゝ、ゝ、藏人のそうゝ、ハ、藏人の
人、わ、盛をいふゝれを、一貫ゝ、ゝすゝ、ハ、何ゝすゝ、
又行幸のゝ、ハ、ゝ、ゝ、清盛曹ハ、中陣ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、一貫ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

ハのゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

一あり。幅の広さて中間に麻を敷きまはすあり也

一かけのうくもうこれ有まくはとして宣命の詞 掛畏

一かもれいつるさいはうん四つれ御ひこい 孫王。そちりごらしべし

一孫王為法院。例 真子内親王 文徳絲王十歳 仁和五年 惟彦親王 孫王

閑院一家。例 ほくもあくるうつ云也 紙鳥に表

一かけまくも 秋切をかはさいは昔 ほかる心也 おくこ外ちの

ひしまるあれば也 一かくさひ 婢退也

一かろうせくく 輕時 朝時 せくくる也

一かくくの其れといれ 天雅度門 湯津楓樹 旧夏本記

一かくくの 建屋原 うさるれしすせいれ 仍屋敷

くくくくば 一かくちの代ちし 仍 鎌直家

紙とうくと 侯絶とくあ 侯也 紙い色も平絹の五衣也

白袴のうくとも うすさ絹也

一かんの去人見くる 平地 見ると 公仕とくめ色絹とくあ

一めくらしとくる 鷹 鷹くて 落し 声とくあ すると 食べくう

くらしまもは

一かくの地 はいつ地 ふくくう

地也 或 海地 ごえく 野 貝ちとくあ

ふをべあくうこ云

一見まくてはいくく 胡馬嘶小

越前国 東南校 馬ハ上く 胡玉代 獣也 仍花 旧宴を

くくくいくゆも

一かう出くうくつくと 長廣 凌

散 琴の秘曲ちち 秘 康ち 華陽の高くて 仲くまあひてつくく

也 仲人ハ貴 冷泉の多代也 一かくくくゆ代 大納言 織夏令

云、大納言二人云々、今の文のごとくなるべし、二人の外いかゞとも
かるれば、侍の字とくるべきなり、寛平遠流の時、三人乃うち
一人、侍官あるべき世なり、されば乃字
とかくべきにもあらず、侍大納言といふこゝろ、中納言四人
人、侍十人とかくなり　一切くる波よりけて　遠の人々も
一かくへ十づゝ　十列とは、東宮の舞人十人、すべて舞
すべき也、とかくて、神社の行幸、関白の賀茂春日詣など
石奥して、社仕えて来るもの、舞を
よくするものゝ、右近の官人、をとゝのむ、心情、時
柴ちとゝ、雲客、舞人、十列と奥しかくるもの、源氏の去伯若
しるべし

かりそめにて　長徳二年八月九日、
堂衆千時　辞右大将、同日、童六人、為随身、三年十月九
日、勅賜右近衛府生各五人、為随身、侍童
みな、今案、是、陪乃、うしゆめて、ぴゝさぬ、ぞ、ぞ、ぬ、
すゝうしゆ、みてれど、それ、義よりの、反、不見、水手、うべし
や、ゆゝうゆゝ、ゆゝ、ゆゝ、

一かさつんうるく　うつくん方なるも此時分調ひし寒の久しも
一かんやぐらにしめし紙ぐいして弾じいして強さうも紙屋の人
初て也紙すきを学ばしてこれも紙屋の人
一かうるいうぐうるて　紙とつくるてもこれはまるのやううも
ちくうけうぐくてせ　青ハ絵ハ絵ハ　ハ　の日ハ守綱云
もしもとらくば此せうはふくもしわき紙をとらのあざあ
れいうるいうるるのゆとるを指遠九日云慈義云紙を
まあと思ひけうるとうる　絵ようくぐ云ん
一かうるようくるくるあうを
うあうや四疊ちう
呼　漢城堂にて絵をたやうようるうるの絵うも又桂院晩年
はすうるしくるやうや　一かうるは此ぞ　次戸そも

〆今云也安信は衣類也
元表ちう
のさいるて漢氏の十門は般昌ちん時とも
一神さびこけう年月のちう　漢の久志き意義の方と云神閑又、
神家正久もつ成四也又久後也
れ絵桃園家ちびは家ようるて也
一かうるつて　雪もしよハ雪の巻也
一かつくの下風　祭の奥は桂いうようて心也
一かけうやハうけうやうとハ也ひけうやいと也ぞ家の山襖そ
ちくて陳昭のうそぐうんとつる也　荷測ようくるう
一風のちくけぐくすちう　文選　豪士賦序落葉俊微風

一陸奥風力蓋寡風力勢ハ内大臣四中元頼ヤネバ不成ヒヤ
今ハ云ヒテモ源氏ノ中ニ云ヒツヒヒ云ヒヒヒヒ
ヒヒ不成ヒヒヒ
一風ノ吉ハ行ヒ風生行ヒ意
同日月廿五日時辰上行朗
一かけてゝへゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれいや籠のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一か

不敢般童男童女舟中老文集

一かくのごとくなる　喜春楽呂也　及音ハ呂より律ようつる也

喜春楽ハ黄鐘調の楽也　平調なるもつて用ゆる也　俗説

鐘調も律也　呼ゆくゆくゆく　呂律次第

一かくのごとくなる　ゆくゆくゆく　ゆくゆくゆく　よりねば祈也

一かくのごとくなる　大月ごとくなる也　一風の吉秋よりなると　秋風楽

の心也　平調元調　羽盤渉なるなり

一かくのごとくなる　ゆゆしさなる　猶ハ花の色うつろひて秋の色也　古今

よりよハ猶とゆゆしきなり

本化一云　天延太神踊堅庭　陪般若涅槃八軸　散　今業

ゆゆしき若い者いかゆゆしきなる也　そなたなる　思ひ　悪ひ　悪ひ

のつるのつるはつるすすのつるさとなる　なるなるなるなるなるなるなるなる

一かけかけかけかけ　急也

家よりて　家の家の家の家の家の家の家の家の家の家の家の家の家の家の家の家

一かけかけかけかけ　九月ごとく　九月ごとく　九月ごとく　十月ごとく

ごとくなれば九月ごとくなる　命をうつると云

一かの御いとぎなるなるなる　家和よ嫁合よ　男女山川を引

と云ふ　深ごとやごとやごとやごとやごとやごとやごとやごとやごとやごとやごとや

一かのやうなる　父子と云　敬也　一かのやうなる　梅の花

不吉　相通也　一かそう　若菜　春の若菜也　春ハ梅

秋ハ南方　冬ハ北方　一かすみなる月と云　月露と露

ぐそぐい・鳥もちのんと沒ぐ・ふこ色を感じていへり

一かんなのこ 俗名を本・何時始起て行人不知見往古和泉

八方紫・某花の毋花稿や

かうしても 某の名いあつひとを云 初猛ハ夕当れもく文章生

ふてあつしをいへり・花株一枝嵐山行玉今ハ課試及第ふ

変化末・紫風ふうの紫のhoや・博士よりへるるや

一祥五月九日あまつ月沒ぐに・六条院ニ行幸ふ 康保二年

十月廿三日・村上天皇行幸雅院ニ行幸 右記

かの元象 屏 相象 某雅院ふ・漢武帝ノ相撲ふ・ふ

ふや・東家ハ蓮ふ

一かふ一のぐいつふ巻をて

蓮ふ・すあふ

一ふふふふ 沼ふふふふ

一賀皇恩 何 延喜六年月十六年ハ賀光ふ・賀皇恩万歳ふ

ふ・ハ花ふふふふふ

一かふふれだふふぐ拍子云心や

若ト

一かちり 歩り也・中将廿将・ふ行ふふふ

一かけ和ふも 隠負のけ和也 一かふ義石清水縁時の条 摂政明

白和ふの時のすや

一かふふぬふて ふぬふて云

雅の名也・ふふ云ふ

一かんぐふ 神賀也

一かふふふふ・ふの示一ふふ引てふて色ふあふすれふ

一ふふひふふれふふ・びふふ 琴ハ弦ふふ・宝ふのづふ・せ

ふあふふぐひ琴ふ 緩急ふふ湘

一かふふふふ

一かふふ 雅ふハ・石ふ

ふすふふ・ふふ・ふふ雅ふハ神ふふふふふふ別紙ふあふ

一かれこんのこうもい　唐織地のかぶせ
かうもりもかわハ　涼流せ　一かんこうち　若日なるべ
一かすれ物の　合食して春日ゝ伊勢おりゝます。せ春日なるこゝ石ばの
物こや中ぐゝ心　秋好の中宮　古桜住の宿中さあひゝ
一かるぐゝ　うて笠せ　一かるいかるぬぐき　あやゝ心
一かうハ　暗舞れ奇妙ハ功者ゝ　一かさあるきて　地と早ゝハあゝ
ゝるゝるゝいあゝ行せ　一かゝれげよゝづゝゝいあゝずや
義人が侍院ゝいハ別ゝ　ゝゝゝゝゝゝれげよゝづゝゝれあゝ
ところゝゝ也　ひげゝの水　蔵の麓中ゝゝゝゝゝ也
ゝひめ　かんゝるゝう　ゝこゝんゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一かの鳥　姉妹なるべしとかの人云　一かうもんなり　庚申

一かるさるもどうん　中ゑもの　一かるおとりけ　おとり服のえも

せのもとの色　一かけうれやきうの哥

一かのうぐいす紙　若き人　是紫日　一かるおとり紙　隠元漢若

者是人　現世口中　岸出蓮　花　一光毛孔中出牛乳　輪檀香

法華経　一がまけさう　降魔相　不動尊

念怒のおもあらはる心　一かさく　鶴や　寂しくて　鶴

らしきら　一かさくさく　夾雲　毎雲　何ら

一かるとも紀ちうい　出雲寺

位をこそ　一かしらけ　俗髪　一かしらけあるば　法しけ

めいとり髪の毛あるば　月けげ　立りをもふとりめる心ちゑんと

一神ある　神分る心　絵もむ　ちるべし

一かざりそと　一生男　一風のまざれ　地獄のかのなな

風のまざれと云　一かれも　不離や

一かくさう　学生や　一かうど　大やけけ　都

一かせこうげふ　岩ほ　ちきちげけべよ　文選　宋玉風賦曰

壁石代　朱　梢　殺林　莽